

守り続ける福島、 変わり続けるふくしま

福島県立福島東高等学校 普通科・2年 シンド ユウミ 穴戸 結実

十年前の三月十一日、当時私は小学一年生でした。突然激しい揺れに襲われ、何もわからないまま校庭に避難し、頭が真っ白になりながら両親が迎えに来てくれるのを待ちました。黒い津波が街を跡形もなく飲み込み、原発がメルトダウンを起こしたというのに、妙に綺麗な雪が降っていたことを鮮明に覚えています。

時が経った今、昨年からコロナウィルスが流行っていますが私たちの県は県民の安全性と自由を一番に考えてくれています。自粛と言いつつも感染対策を入念に行ったうえで参加できるイベントを催したり、私たち高校生が街づくりを提案する「高校生フェスティバル」を応援してくださったりと、どんな状況にあっても諦めずに前を向こうと働きかけてくれました。

生活環境も街の様子も変わっていった福島県ですが、その中でも決して変わらないものが一つありました。

それは人と人との繋がりや温かい支援の輪です。

SDGsの項目に『住み続けられるまちづくり』とありますが、実際に行動に移すのはとても難しいと感じます。住み心地が良いと感じるには心の障壁をなくし差別や偏見をなくす必要があるため、いくら災害に強い街を作ったとしても人との繋がりが絶たれてしまえば未来も希望も生まれないと思うからです。今福島県は『シトラスリボン運動』を行っていますが、この運動をしようと思えるのは誹謗中傷や風評被害で受けた苦しみを痛いほど分かっているからだと思います。

差別や偏見は簡単になくなるものではありません。以前私は熊本で行われたサミットに参加し、未だに水俣病の風評被害に苦しむ声を聞きました。きっと福島もまだ風評被害は消えていないのだと思います。しかし、繋がりを大切にしてきたからこそ福島は復興に

向かって歩み続けられたのだと私は信じています。

SNSやコロナの影響で人と人との話し合いの場が少なくなっている今、私たちはどのようにして人との繋がりを保っていくか、そして新たに輪を作り出していくかが課題になると思います。

そこで私が提案するのは住民参加型の議会を開き、市民、県民に寄り添った行政を展開することです。

今、私たちはコロナウィルスに対する不安や自粛による閉塞感で押しつぶされそうな日々を送っています。県や国から情報を与えられるとはいえ、悩みは人によって違います。誰かに相談したい、解決策を聞きたい、これからの県の方針を知りたい。気持ちは募るばかりですが、私たちでよい案、支援策が出るものではありません。そこで記者や役人だけでなく住民票を持っている人なら誰もが参加できる議会の場を設ければ、住民の不安も和らぎ、これからの生活を前向きに暮らせるきっかけにもなると思います。

直接会う場を設けなくても、テレワーク等の通信機器を生かせばどこでも参加できるようになりますし、これから5Gが発達すればよりスムーズな議論ができる自由な場になると思います。

私はこの町が好きです。そして、この町に住む温かい人の心に支えられ、励まされて育ってきました。しかし、大学に進学したら一度この町を離れなくてはならなくなるかもしれない。そう思うと、いつまでもこの絆が続いてほしいという思いが一層強くなります。高校生という立場では行動範囲が狭く、復興に関して出来ることも極々わずかなものばかりですが、未来の福島県に住む子供たちが「私の地元は福島県です!」と胸を張って言うことができるように考えて、行動していきたいです。